

地域と大学教育への思い

城西短期大学副学長 白 幡 晶

長閑な地にキャンパスを構える城西大学の創立当初は、勤務していた事務職員の中に、近所の居住者や農家の人が多かった。従って、創立者水田美喜男先生の温かい人柄と合わせて、坂戸地区では、本学は、顔馴染みの職員がいるアットホームな地域大学として受け入れられていたに違いない。近隣の自治体に公務員として就職した卒業生も多く、自治体が大学の知識を必要とするときには、卒業生からの依頼に協力を厭わない身近な大学として頼りにもされてきた。本学が、公開講座、城西健康市民大学などの市民ニーズに合わせた活動を継続してきたこともあり、「相互連携協力に関する基本協定」等を、坂戸市をはじめとする自治体と締結するなど、時代と共に組織間の協力関係も構築されていった。

しかし、地域とのつながりが大学の教育研究に深く関わるようになったのは、現代政策学部の石井ゼミが休耕地活用プロジェクトを始めた頃からではないだろうか。環境社会学を専門とする石井雅章先生（現神田外語大学教授、教育イノベーション研究センター長）は、キャンパスの周りに休耕地が多いことに注目して、高齢化に伴う地域課題を解決する試みをゼミ学生と共に授業の中で進めようと考えた。使われていない農地を借りて、学生が手分けして酒米を育て、収穫したコメを使って近隣の酒蔵で日本酒を製造し、販路を考え、日本酒を提供する飲食店と交渉するなど、いわゆる6次産業化のプロセスを学生が学び、日本酒「醸彩滝不動」というオール埼玉ブランドの地域に喜ばれる日本酒を作り上げた。学生にしてみれば、学んだ専門性を生かして農家、行政、企業と連携をとり、地域の人々が喜ぶ成果を上げられたことで、地域の大切さ、自分の成長を実感したに違いない。このプロジェクトは、2014年には、経済産業省が選定する「社会人基礎力を育成する授業30選」を受賞するまでになった。残念ながら石井先生は他大学に転出してしまったが、この休耕地活用プロジェクトが、他学部の教員とも連携しながら進められたので、私も含めて少なからぬ教員が地域と大学教育を結ぶ必要性を強く感じるようになった。

また、全学的に地域を志向した活動を進める大学等を支援する文部科学省の「知の拠点整備事業（COC）」への採択を目指すことで、地域志向の教育の重要性を学内的に盛り上げることも試みられた。当時は実質の伴わない、助成金獲得のための体制づくりが優先されてしまい、残念ながら申請自体は二次審査で不採択となったが、地域を授業科目の中に取り入れる意識を広く教員の間で共有するきっかけになったことは間違いない。

ちょうどその頃、本学薬学部が「彩の国大学連携による住民の暮らしを支える連携力の高い専門職育成」をテーマとした2012年度の文部科学省の助成金事業にも採択された。このプロジェクトは、埼玉県立大学、埼玉医科大学、城西大学、日本工業大学の埼玉県にある4つの大学が、自らの専門性を他の専門領域と協力しながら発揮する力を養う機会を学生に提供して「連携力の高い専門職」を育成することにより、地域社会に貢献しようとするものだった。この活動自体は、医療福祉系の専門職（学内では薬学部）を対象としたものであり、地域との直接的な関わりをもつものではなかったが、地域を意識しながら議論する演習を中心とした連携教育プログラムの策定は、文系学部も含めて、今後の地域課題を大学の教育研究に取り込む上で非常に重要な視点を提供するものとなった。

この巻頭言では、埼玉東上地域大学連携プラットフォーム（TJUP）の立ち上げ以前の活動を通して、長く感じていたごく私的な思いを綴らせていただいた。